

た。

私は立川飛行機まで八高線回りなので二時間かかりました。立川飛行機への空襲は夜でした。その時私は昼勤務でしたので助かりました。もし夜勤でしたら死んだかもしれません。組み立て工場の大きいのは爆撃で破壊され、相当の犠牲者が出ています。空襲警報が出て逃げ間に間に合わないのです。

立川飛行機夜勤の時、蒲田方面空襲を見ました。B29爆撃機が中央線上空を低空で飛んでいきました。東京方面だなど思い数えましたが、三〇機までは数えたのですが後は数えられませんでした。その後、東京方面がたちまち火の海となったのを見ました。

このようなことを今断片的ですが思い出しています。現在私が生きてこられたことは「奇なるかな我が運命」と深く感じるものです。

## 在外引揚、現地召集、

## 抑留・強制労働、そして帰還

長野県 赤羽一成

大正五（一九一六）年九月十九日に生まれた私の戦中の体験は、次のごとき労苦の連続であった。

昭和十五（一九四〇）年十二月、渡満、奉天市

昭和二十年五月、召集、北満州石頭、迫撃砲隊入隊

昭和二十年八月十七日、終戦につき除隊

昭和二十年九月、捕虜となりシベリア、チタに送ら

れ強制労働につく

昭和二十四年五月、ナホトカより帰国し、敦賀港上

陸

私ども家族は満州の奉天に在住、生活していたが、

私は昭和二十年五月、現地召集となり、入隊は北満州石頭（牡丹江省寧安県）の迫撃砲隊であった。年齢は

三十歳の私の初年兵の生活は、どこも同じで、朝の起床から就寝の時まで、十分の休みもない忙しさである。迫撃砲を引くのは馬であるから、この馬の世話が大変だ。今まで馬を扱ったことなど一度もなかったから既当番が一番辛かった。臭いのブンブンする馬糞をすくい込んでいると、反対側の後ろ脚で蹴られ、その痛さに息も出なかった。水飼いに連れて行き、馬に足を踏んづけられ、跳び上がるほど痛い目にあった。また腹が減っているので馬糧の豆粕を食べ下痢をしたこともあった。

不寝番は二時間交替である。一日中休みなしの生活で、その夜中二時間の勤務中、つい、ウツラウツラと居眠りをし、週番士官に怒られたこともあった。

実弾射撃演習で五発撃ったが一発も当たらず、隣の標的に当たったのもあり、鉄砲もなかなか当たらぬものだと感じた。そのような生活、勤務中、班長が他の班長が私に用事があるからと連れていかれたが、その班長は長野県辰野町の出身で、私と同姓の赤羽という伍長であった。叔母の嫁入り先の本家で、子供の頃遊

んだことのある人で、意外さに驚かされた。二人は、伍長と二等兵の関係を抜きにして話し合い、帰りには羊羹を二本もらって嬉しかった。羊羹を班内で食べることは新兵には出来ぬので、便所の中で食べたが美味しかった。そのように軍隊での初年兵の生活は自由のきかぬものであった。

その後、小隊長室に十二、三人が呼ばれて「お前たちは上等兵候補に上がっているから、これからも頑張るように」との話があった。多分赤羽伍長の協力があつたと思う。

入隊後二カ月が過ぎた頃、部隊が南満州方面に移動することになった。汽車に乗り着いた所は朝鮮国境の安東の少し手前の温泉の出る小さな町であり、二日ばかりは久しぶりに入浴が出来た。さらに移動し山中に入り、テントを張って駐屯することになった。後に考えるとこの移動が私たちの命を救ってくれたと思った（終戦近く、ソ連軍の侵入により、北滿の軍隊が悲惨な末路をたどったということを、帰国後聞いた）。

軍隊生活の話に戻るが、裸馬に乗り、乗馬演習の帰

り農家に寄り、卵を買い、息もつかず五個飲んだら皆が驚いた。それほど体が栄養を欲していたのである。

初年兵の教育訓練も一段落し、一週間ほどして、海岸近くの山で洞窟を掘ることになったが、タガネとハンマーで岩盤を掘る。昔、日本の「青の洞門」を約三十年かけて掘ったという坊さんと同じで、十日かけても人間一人が入るくらいしか掘れなかった。

辛い馬の世話をしなくてもよし、穴も本気で掘っているわけでもなし、今までにない呑気な兵隊生活であった。米軍の上陸を阻止するための洞窟を掘るのに、ノミと金槌で出来るとは思わぬので、山の上から青い綺麗な海を眺めていたのである。この山には大きな蛇がいるような、人も入らぬ深山であった。

昭和二十年八月十五日であったか、部隊全員に集合がかかり、部隊長が「日本の降伏」を発表した。我々現地召集兵は「直ちに召集解除する。帰宅せよ」と言われたので、ほっとした思いが先であった。

二、三日分の食料を配給されて、約三十人ほどが帰ることになったが、武器を持たない丸腰なので、なん

となく心細かった。駅に向かう道々の民家の軒先には中国国旗が出されていた。いつ用意したのか、彼等は日本の敗戦を前から予期していたのであろう。我々に危害を加えるのではないかと心配したが、その気配もなく駅に着き、汽車もあったのでホッとした。

奉天駅に着いたのは夕方、すでに薄暗くなっていて、市内ではパンパンと銃声が聞かれ、危険だと思いい一緒にきた戦友の駅前アパートで一泊して、翌朝帰ることにした。中に入ると驚いた。大勢の男女、子供が大広間に雑魚寝していた。アパート住人皆が大部屋に集まっていたのだ。当時、現地人の襲撃があるかも判らぬので、共同防衛のためだった。

翌朝、戦友夫婦に礼を述べ再会を約して、七時頃我が家に向かった。五キロの距離がある市内の日本人街は荒らされていないように見えたが、日本人と現地人が混在している街に入ると日本人の家が襲撃されて、戸、障子や畳まで無い家が目に入ってきた。日本人で歩いているのは私一人なので、一層心細い限りである。

砂山住宅に入ってから、日本人も見え、荒らされた様子も無いのでホッと安心した。家に入ると、妻はびっくりして声も出ない。妻・子供が元気でいるので嬉しかった。妻は産み月で大きな腹をしている。砂山住宅街は、現地人と今まで関係が良かったので襲われずに済んだが、隣部落の日本人街は襲撃を受け、死人まで出たとの話であった。また、ソ連兵が毎晩の相手の女性を求めて来るので、部落長は頭を悩ましているとのこと。幸いにして我が家はそれらの害も受けず済んでよかった。

弟の邦広が、東京の安田銀行を辞めて奉天の会社に勤め、その社長の長女と結婚していたが、その工場は襲撃され、メチャメチャになってしまったので一家は砂山街に避難をしていた。

九月の初旬だと思いが、隣組長から連絡があり、「明朝九時に砂山街広場で重要な話があるから集合せよ」とのことで、軍歴のある者は皆集合した。

部落の幹部連中が何やら話し合っているなと思っ  
ているうちに、八路軍らしい兵士が銃を持って、我々を

取り囲んでしまい、四列縦隊にされ北に向かって行進を始めた。我々には何の話もなく、どこへ何のために連れていかれるのかもサッパリ判らない。これはただごとではない、とは気付いたが逃げようとしても五十メートル置きに銃を持った兵士がついているので、無理だと思った。日本人街の大和区を過ぎ、奉天市役所の前から北陵に向かう一直線の広い道路に入った頃、誰からともなく「捕虜」という言葉が出ていた。既に、十キロ以上も歩いてきたので皆は大分疲れていた。

その頃気付いたことであるが、部落長や幹部連中は誰も居ないのである。彼等は、どこへ行くのかは知っていたのだ。弟邦広も私と一緒にいる。二、三度遊びに来たことのある北陵の少し手前にある、旧日本軍部隊の建物に収容された。家族の者は、何一つ知らず、別れの言葉もかけずに来たことが一番心配であるが、連絡の取りようがない。

飯が分配され、食べながら話し合っ  
て「捕虜は確実のようだ、逃げ出そう」との相談が持ち上がったが、

夜になると銃声がひっきりなしに聞こえてくる。脱走者に対するものではないかと思うので決断しかねた。食料の分配が少ないので、これから馬を殺すというので外へ出てみたら、馬に日隠しをして、鶴はしで鼻面を殴るところであった。私は軍隊で馬を扱ってきたので、可哀想で見えていられず室に戻った。

この宿舎に来てから一カ月ほど過ぎて、衣料品の支給があり北奉天駅へと向かって出発した。七キロの道である。「これから日本に帰らせる」とのことである。貨車一両に五十人ぐらい詰め込まれ、翌日汽車は動き出したが、南ではなく北に向かっていようだ。まず内地帰還は絶望のようだが仕方なしである。

一日二回、直径三十センチぐらいの大きさのパンが差し入れされるが、入り口に陣取った連中が大部分取り、奥に居る者の所へ来る時には一かけらぐらいの小さな物になっていた。それでも支給された米があったので、汽車の停車中に降りて、汚い川の水や溜り水で飯を炊いて食べた。列車の屋根の上には兵士が銃を持って逃亡を防いでいる。

線路の脇には幾つかの死体が転がっているが、誰もそれを見に行く者がいない。弟邦広と相談して、「夜、逃げ出そう」と計画したが地理不案内と死体の数を思うと遂に実行出来なかった。

我々より前に、同じように沢山の人が輸送されていったかとは想像できる。途中、駅のない所で一日停車していることもあるので、長いこと入浴しないため発生したシラミ取りをしたが、現状の惨めさと、この先の不安で誰一人歌を唱う者もないが、髭が伸びて困ったので鋏を借りて切って、幾分気持ち明るくすることが出来た。

私は、皮膚病となり痒くて夜も眠れなくなり、また、支給される食料も底をついてきて、コンニャクの粉を水で溶いて煮て食べたが、塩が無いので何ともまずいものであった。何日過ぎたか判らないが、ソ満国境の黒河に着いた。黒龍江(アムール河)を隔ててソ連領のブラゴエンチェンスクである。千メートル程の川幅と言われたが、私の目には五百メートル位かと思われた。黒河の街も実に殺風景で、犬などが外に出て

いるが、人影は見当たらない。

船に乗せられて滔々と流れる黒龍江を渡り始めたころ雨が降り出した。長い汽車旅でうんざりしていたので、これから宿舎に入れられると思っていると、それらしい気配が無く、雨はドシャ降り、雨具も無く、雨で座することも出来ず、一晩中一睡も出来ず、心身ともにくたくただが文句の持っていき所が無い。

朝になったが、グシヨ濡れで寒い限りだ。誰かが線路脇の畑のあちこちに馬鈴薯が散らばっているのを発見、お陰で空腹を満たすことが出来た。その畑を五十センチほど掘り下げ、そこへ天幕を張り野宿した。今後どうなるのサッパリ判らぬ。幾日ここに居たか記憶は無かったが、列車に乗る時が来た。

貨車には棚を付けて上下に座れるようにしてある。奉天から黒河までの貨車より広いので乗り心地は良かった。この列車はどの方向に向かっていくかが問題である。諦めてはいしたが、多少は日本へ帰る望みは持っていた。東に向かえばウラジオストック、これは帰国を意味する。西へ向かえば捕虜は確定する。しか

し列車は西に向かって進行している。二日ばかり乗りタタ市に着いた。

列車から降り、元気の無い姿でタタの街を行進していくと沿道には人垣が出来ている。その人の顔を見て驚いた。いろいろな人種の集まりである。その中に日本語で「心配するな」と声をかけてくる人もいた。

松林の中の自動車の車庫のような大きな建物に我々は収容された。これから我々の捕虜生活が始まるのだ。捕虜収容所(ラーゲル)での一日目の夜を迎えた。コンクリート床の上に毛布を敷いて寝るのであるが、狭い所に五〇〇人を詰め込んで、頭と足を交互に並べて寝る。十一月は寒いのだが人間の体温であまり寒いと感じなかった。小便に起きて帰ってくると私の寝る場所が無い。無理して入り込んで隣にいた者と喧嘩になり、取っ組み合いになったが、相手の方が強くて問題にならなかったが、皆が止めてくれたので大事にならずに済んだ。

翌日からは自分達の宿舍作りだった。地下一メートルばかり掘り下げ木造の家を建てるのであるが、大工

の経験者がいたので僅かの間に出来上がった。寝台は上下二段で、四人であり、一棟の宿舎に一二〇人ぐらい収容できる。一週間もすると病人が出始めた。病室が無いので、一般より少し離れた所に一緒に寝かせ、ソ連の女医が時々来ていたが、特別の手当てをする様子もなかった。一人が腸チフス(?)になり、三〇分おきに便所に行っていたが、だんだん衰弱して、妻や子供の名を呼びながら遂に死んでしまった。

一班は十五人で構成された。食事は班単位で一人黒パン三〇〇グラム宛支給。一本二キロの黒パンを頭数で分けるのが大変だ。秤が無いので、段ボール紙で皿を二つ作り、天秤にして公平に分ける。それを皆が食い入るように見ていた。パンの他に小魚の塩漬けなどが支給されたが、小ささまざまなので、食事当番がクジ引きを作り、順番に取る。夕食時など冬は真っ暗になるので、炊事場から班まで運ぶ時に、中身を誰かにかすめとられることもある。

しばらくして服や靴が支給され作業に出ることになった。作業先は土方、伐採、パン工場、肉工場、建

築現場、雑役(便所掃除ほか)等々。朝点呼時に作業現場が通達される。腹が減っているのでパン工場や肉工場(ミアソ)へ行くのを皆は望んでいた。作業時間は八時から五時までだが、七時にラーゲルの門を出るので六時に起きて朝食を済ませねばならぬので結構忙しいのだ。

零下二〇度を超すと作業に出ないが、日が昇り少し温度が高くなると途中でも作業に出なければならぬ。十二月になると日照時間が短くて、午前十時頃までは薄暗い、午後は四時には暗くなってしまう。

肉工場は屠殺場もあり、牛や羊を女性がやっている。血の海の中でテキパキ作業をしているのには感心した。我々の作業は枝肉を滑車に吊り下げて加工場まで運ぶ作業で、肉はすでに冷凍になっているので小刀で削り取って生で食べた。昼食時には肉のそぼろを出してくれるので満腹になる。帰りには削り取った肉やそぼろ肉を飯盒に詰めてくるが、工場を出る時に守衛の検査があるので引つ掛からぬよう十分の注意が必要で苦心をする。

パン工場では雑役ではあるが、白パンなどを掠め取る機会があるので、十分食べて、大きなのを二つぐらい飯盒に詰めてきた。守衛には要注意であるが、ある程度大日に見てくれていた。ある時は、駅の貨車からの荷降ろし作業に出た。その貨車の一つに馬鈴薯や人参が積んであった。二人でその中に入り、防寒オーパーに取り付けた袋にいっぱい詰め込んで出ようとした時に戸を締められた。この野菜はこの駅に降ろすのではなく、内からは戸を開けることは出来ない。作業が終わり帰る時に点呼を取ったが二人が足りないので大騒ぎをしている様子が貨車の中から判ったが、貨車からの声は聞こえぬらしく、大声を出したが誰も気付かない。仕方なく棒を見つけて戸を力いっぱい叩きやっとなげてもらった。駅員にはさんざん怒られ、戦利品の野菜は取り上げられてしまった。

道路作業はカチカチに凍った道を、太い鉄の先の尖ったバールで掘るのだが、一日かけてもほんの僅かしか掘れない。外の仕事で通る人に「ダイチエクリツチ（煙草をください）」と言ってねだった。三人に一

人はものになった。この工事は水道管を敷設するので地上から三メートルぐらいまで掘る。深くないと凍るとのことである。雑役は公衆便所の清掃で、これが一番嫌な仕事だ。便槽に入り、カチカチに凍った汚物をバールで突き砕くのであるが、飛散すると粉が衣服について、宿舎（ラーゲル）に帰ると解けて匂うのでたまらない。

私は皮膚病の疥癬がだんだんひどくなり、指の股、脇の下、股ぐらにいっぱいできて、衣服の下着に膿が付着して苦しんだ。月に一回、街のある浴場に行くのだが、五〇〇人が入るので、時間は十五分間であった。シャワーを浴びるだけだが、三回ほどの入浴で疥癬が治ってしまった。

また、シラミがわいて痒くてたまらぬ。シャツの縫い目にシラミが列を作って並んでいる。厳寒の外にシャツを出して二十分もするとシラミが凍ってしまいシャツを振るとバラバラ落ちる。しかし、凍っても解けるとまた動きだす。そのためドラム缶に入れ煮沸退治し、シラミから解放された。

ラーゲル内にはボスがいて内務一切を取り仕切り、暴力を振るって君臨していた。ボスは監視兵に取り込み勝手な振る舞いがあったとかで、作業場で少し気の強い者が集まりボス打倒の相談をし、私も加わった。ある日の食事後、打ち合わせ通りに、今までの素行や横暴を列挙し、遂にボス打倒に成功した。ソ連側の出方を心配したが何事も無く、彼は他のラーゲル移されていた。その後は通訳がボスに代わり、ラーゲルは民主化された。

ボスが打倒された後、袴田という男がラーゲルに来て、「友の会」を作るといふ話があり、内容を聞いていると、共産主義の勉強会である。唯物論や史的唯物論の講義を聞いた。若い者の中から、別の所で三カ月ぐらいの教育を受けて、アクチーブ（指導者）となり、各グループに配置されてきた。

今までは、夕食後はマージャン・碁・将棋など、一食分の飯を賭けて夢中になっていたが、勉強会に変わってしまった。月一回の発表会があり、私も一度意見発表したところ内容が受けて、アクチーブの一員に

編入された。

「働かざるもの食うべからず」で、作業量が三段階に分けられた。食事の量が違うので「さあ、大変」だ。当然作業意欲が盛り上がってきた。私の作業現場は大きな病院の建築現場で、今までは作業が遅々として進まなかったが、気候も良くなり食事の関係もあって、作業能率はどんどん上がってきた。この現場はラーゲルの八〇%が動員され、今年中に完成することと、作業が二交替に編成されて、前段と後段のカマンジール（指揮者）を選挙で決めることになった。どういう風の吹き回しか前段のカマンジールに私がなり、後段が松本市出身の小松という人になる。期せずして同県出身の同士であり、現場に宿舍が建てられ二人は特別の一室が与えられた。

私とソ連人の技術者と日本人技術者で相談して人員の配置を決め、私が通達をした。作業の監督と作業量の出来高を記入し、食事の三段階を決めなければならぬ。これが大変な仕事であった。土を掘った立米、煉瓦運搬、煉瓦積み上げ高とノルマ未達成の現場は手

伝ってやり、どうにか達成させるようにした。

最低の点は絶対に付けられぬ、食物の恨みは恐ろしいのだ。他ラーゲルからも応援が来た中に将校で松本市の原田商店の支店の息子と出会った。奇遇だ、彼と私が指揮者なので驚いた。作業は急ピッチに進み大体の建物が出来上がった。お陰で私も煉瓦積み技術を覚えることが出来た。

しかし、下水溝を掘る時に大事件が発生した。チタ市は寒いので地下五メートルぐらい掘り下げなければならぬ。一番下で作業していた二人が土砂崩れで埋まってしまった。それを助けようと三人が入ったが、また崩れて三人も埋まってしまった。「さあ大変」。全員作業中止して救出にかかるがどこに頭があるか判らないので手で掘るしかない。手間がかかるので心配だ。ソ連軍の捕虜支配の一番上の少将も駆け付けてきた。

二時間ほどで一人救出、三〇分後には全員が救出されたので、その中の一人に聞いた話では「埋もれた時に立っていたので割合に圧力が少なく、そのうちにだ

んだん気持ちが悪くなり気を失ったので、皆あまり苦しくなかった」と言っていたが、全員救出でホッとした。

責任問題でG P U<sup>ゲッペーウ</sup>の取り調べを受けることになった。通訳によると、ソ連人の監督が私に作業前に矢板をして作業するように指示したと言っているが、私が「全く聞いていない」とそのことを正直にG P Uに話すと、ソ連人監督は監獄行きとなり一家が大変なことになる。私が聞いていたことにすれば「貴方の責任になるが、捕虜であるから大した罪はないから」と頼まれて承諾し、私が患者になりソ連人監督は救われたらしい。

私は建設現場カマンジール（指揮者）を首になり山の中の伐採現場に回された。この現場は十二人いて、ラーゲルから大分離れた小さな山小屋に住み、若いソ連人が一人いただけで、作業は気楽である。監視のソ連兵は仕事をせずに他の場所へ遊びに行っていた。もっとも、山の中で我々が逃亡する心配はない。

ある時、兵隊が大きい犬を射殺して持ってきたので

早速料理をして食べたが、後日飼い主が探しに来たが「ニボニマリー（知らない）」と言いつ通してしまった。

一日のノルマは二立方メートルで、午前中に仕事は終わったが近い所は切りつくしてしまったのでだんだん作業場が遠くなって行く。途中で地上から二メートル高い所を切った立ち木があり、どうしてか不思議に思ったが、雪のある時に切ったのだと合点がついた。

暖房用の薪切り作業で頭を怪我をし出血がひどかった。そして激痛を感じたので十日ほど入院したが、今だにその傷跡が大きく残っている。また、元のアクチープに帰り、弁論大会にも一度出たこともあった。

そのうち帰国（ダモイ）という情報が入ってきた。

それがやっと現実になり、体の弱い者が先に集められた。弟の邦広もその仲間に含まれていた。別れる時に、メリケン粉の焼いた餅のような物を私にくれに来た。抑留三年目の年であった。私たちも、三年目の終わり頃にいいよ帰ることとなり、全員チタ市で汽車に乗り出発した。平坦地ばかり二日間、山ばかりの森林地帯を一日半かかり、海の見えるナホトカに着い

た。この海の向こうが祖国日本だ。嬉しきいっぱい、「万歳」と叫んだ。

しかし、喜ぶのは早すぎた、ナホトカは集結した捕虜で満杯で寝る場所がない。十キロメートルばかり奥に入り込んだ所で、テントを張って寝たが蚊の大群に襲われた。特に蚊に弱い私は、顔や手がブクブクに膨れ上がり、痒くて眠れない。少し暑いが手袋をはめ、紙袋を頭から被って我慢をした。早速、宿舍作りが始まり、ここへ来たためにまた帰国を一年遅らせることとなってしまった。

それからラポート（作業）が始まり、一般の住宅を建てるのだが、いままでの煉瓦積みでなく、大きなブロックを積むので早く建ち、一年で一部落が出来上がった。

その間、捕虜同士で人民裁判というものがあり、指導者で威張っていた連中が吊るし上げられ、帰国を目前にして自殺する者も出た。まったく馬鹿をしたものだと思う。私も一度裁判にかけられたが、うまく切り抜けることが出来た。

五月二十五日だと記憶している。いよいよ乗船だ。「万感胸に迫るといふのは、今の気持ちか」と、つくづく実感が湧いてきた。船の中のこととは嬉しさのためか、今はぜんぜん思ひ出せない。

敦賀に入港して母国の山々、家々が目に入り、懐かしさでいっぱいだ。「ああ生きて帰ったのだ」と。

船から上陸すると、出迎えに出たのは厚生大臣の中山まさ女史とのことで、日本でも女の大臣が生まれたのだと聞かされた。頭から真っ白になるまでDDT（今は使用禁止）を掛けられ、身体検査があり、二日目、金額は忘れたが金を貰い汽車に乗り故郷に向かう。途中東京駅で、二年前に帰国した弟の邦広が迎えに出てきてくれ、お互いの無事を喜びあったが、その時はじめて妻が昨年死んだと知らされてびっくりして、本当とは思えなかった。一回手紙を受け取ったことがあったが、その後の様子は全然判らなかつた。

辰野の駅に弟や妹が迎えに来てくれて懐かしくて手を握りあった。伊那町駅には町長はじめ区長や共産党や一般の人が大勢迎えてくれていた。駅前で帰国の挨拶

をしたが、共産党かぶれしていたので、内容はソ連の宣伝みたいなものであったと思う。後に聞いた話では「えらく元氣のよいのが帰ってきた」とのうわさであったとか。

我が家に帰ると母が「まあ年をとった」と思われ、抱きついて泣いた。多くの親戚が集まって迎えてくれたが妻の姿はなく、子供は小さいのでキョトンとしている。それを見て私は妻は死んだのだとしみじみ実感が湧いた。

## 二度と戻ることの出来ぬ思い出

南洋―満州―大連の重労働

佐賀県 小松 莊 市

私は長野県で、雄大な富士山の見える諏訪の富士見高原地帯の山林と農業で生計を立てていた家の長男として、大正十一（一九二二）年に生まれた。母は昭和六（一九三一）年三月二日、私がまだ小学校二年生九